

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520239

研究課題名(和文) 日本古代の漢文文献を通してみる東アジアの文学世界及び学術交流に関する研究

研究課題名(英文) Research into the Literary Worlds and Scholastic Exchanges of East Asia as Seen through Chinese-Language Texts of Ancient Japan

研究代表者

河野 貴美子 (KONO, Kimiko)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：20386569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本古代の漢文文献を通して、日本そして東アジアにいかなる文学世界が構築されてきたか、またいかなる学術交流が展開していたかについて研究を行った。具体的には次の3項目を柱として研究活動を実施した。

(1) 渤海使関係詩を精読注解する研究会を開催し、その成果を『早稲田大学日本古典籍研究所年報』に発表した。(2) 「文」の概念を軸として日本の文学・文化史を新たに捉え直すべく研究を行い、『日本「文」学史 第一冊 「文」の環境 「文学」以前』(勉誠出版)等の書籍を公刊した。(3) 日本伝存漢籍に関する国際シンポジウムを開催し、また、論文集や講演等を通して研究成果を公表した。

研究成果の概要(英文)：Using Chinese-language texts from ancient Japan, we investigated what kind of literary worlds had taken shape, and what kind of scholarly exchanges were taking place, not only in Japan but also in East Asia. In particular we structured our research around the following three initiatives.

(1) We held a regular study group for the close-reading and annotation of poetry connected to the Parhae embassies, publicizing the results in the Yearly Report of the Research Institute of Japanese Classical Books. (2) With the aim of renewing our understanding of Japanese literary and cultural history, we conducted research centered on the concept of bun ("letters"), and published books like A New History of Japanese "Letterature" (Bensei). (3) We convened an international symposium on texts of Chinese origin surviving only in Japan, publicizing the results though article collections, lectures, etc.

研究分野：日本文学、和漢比較文学、和漢古文献研究

キーワード：日本古典籍 日本漢文学 文の概念史 東アジア学術文化交流史 国際研究者交流(東アジア) 国際研究者交流(北米)

1. 研究開始当初の背景

近代に至るまで、日本の文学は、漢文による著述と和文による著述、それを両輪として歩みを進め、「和漢文」という独自の文の世界を形成してきた。しかし近代以降、和文学研究の膨大な成果に比べれば、漢文は国文学の研究対象とされにくい存在となってしまった。

しかし近年、日本漢文あるいは和漢文学に再び注目し、スポットを当てようという気運が、日本のみならず、東アジア、あるいは欧米の研究者の間でも高まりつつある。また、漢字・漢文文化や訓読の問題等を、日中あるいは日韓といった二点对照ではなく、東アジアという地域の広がりの中で捉え、東アジアのこぼれ文化、知識教養のあり方として追究検討していくべきであるという姿勢が共有されつつある。

2. 研究の目的

奈良・平安期の日本において、その文化と学術の基本となることばの世界は、漢字漢語、そして漢文によって紡ぎ出される著述や典籍に大きく支えられていた。日本は、中国のみならず、朝鮮半島やベトナムなどの地域とともに所謂東アジア漢字文化圏、漢文文化圏を形成していたのである。そのことをふまえ、本研究は、日本古代の漢文文献の精確な読解作業を通して、かつて日本そして東アジアにいかなる文学世界が構築されていたかを改めて分析考察し、それを文学史・文化史上に正しく位置付け直すとともに、日本に伝存する古典籍資料をもとに、古代東アジアに展開した学術交流の実態とその意義を明らかにしていくことを目的とした。

3. 研究の方法

主として奈良・平安期における漢文文献の調査研究を通して、東アジアに展開した文学世界、また学術交流の様相と意義について明らかにすべく、具体的には以下の3項目について研究を行い、成果を報告公開することとした。

(1) 渤海使関係詩の精読注解 渤海国から日本へ派遣された渤海使と日本の文士との間で応酬された漢詩を精読注解する。具体的には早稲田大学日本古典籍研究所の主催により定例の研究会を開催し、漢詩の注解を進め、その成果を『早稲田大学日本古典籍研究所年報』等によって公刊する。

(2) 「文」の概念に関する研究 前近代日本の和漢の文献に現れる「文」の概念を研究する。具体的には、「文」の概念が日本においていかに展開し、いかなる特徴を現してきたか、近代以降の欧米言語の翻訳語としての「文学」の概念に対して、東アジアの伝統の中で育まれてきた「文学」をいかに捉えるべきか、東アジアの文化史において重要な概念であった「文」を、現在そして将来の文学理論、文学批評の場に引き出し、改

めて正しい位置付けを行うことは可能か、といったテーマをもとにワークショップを開き、その議論の内容を論文集等にまとめて刊行する。

(3) 日本に伝存する漢籍に関する研究 浙江工商大学東亜研究院等の研究機関と連携し、日本伝存漢籍の意義や問題をテーマとするシンポジウムを開催し、その成果を論文集として刊行する。また中国をはじめとする関連分野の研究者との学術交流を積極的に行い、日本および東アジアの典籍文化に関する研究を進め、その成果を学会発表や論文などにより公にする。

4. 研究成果

(1) 渤海使関係詩の精読注解

渤海詩研究会の開催 早稲田大学日本古典籍研究所の主催により「渤海詩研究会」を毎年6回開催し、渤海使関係詩の精読を行った。対象としたのは『扶桑集』及び『菅家文草』、『田氏家集』所収の渤海使関係詩である。そのうち特に、『扶桑集』は、祐徳博物館、松浦史料博物館、徳川ミュージアム彰考館レファレンスルーム、京都大学附属図書館において伝存写本の調査を行い、その成果をふまえたうえで詳細な注釈の検討に及んだ。研究会には、本研究課題の研究代表者、研究分担者をはじめ、日本文学や日本史などを専門領域とする研究者や大学院生が20名前後参加し、一首ごとに複数回の時間をかけて議論し、詳細な注釈を作成した。

「渤海使関係詩注釈稿」の公刊 渤海詩研究会において精読した成果を『早稲田大学日本古典籍研究所年報』第6号～第9号(2013年～2016年)において「渤海使関係詩注釈稿」として公刊した。これで本研究課題の開始以前に公表した部分(「渤海関連詩を読む」『アジア遊学』54～60、62、64、66、69、71～73(勉誠出版、2003～2005)、高松寿夫研究代表「日中朝をめぐると日本古代文学についての研究 渤海使と文学・『聖徳太子伝暦』」平成十五年度～平成十八年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書(2007)及び『早稲田大学日本古典籍研究所年報』2～5(2009年～2012年))と合わせ、現存する渤海使関係詩のほぼ全てについて注釈を作成し公表公刊できたことになる。

今後の展望など 日本と渤海の外交交流の中で行われた文事は、日本の漢文学のみならず、和文を含む日本古典文学にも反映波及する問題である。またそれは、東アジア漢字漢文文化圏の共有遺産として貴重な意義を有する作品群を残したものと評価できる。渤海との外交交流と文事について、近年は、歴史研究の立場からのみではなく、平安文学研究の立場からの関心も増えつつある。そうした状況に鑑み、渤海使関係詩の精読を一通り終えた後、当該研究会は2015年10月より渤海関係文筆資料研究会として新たなスタートを切り、『続日本紀』等の史料に残る日

本渤海の外交文書の精読注解の作業を始めている。これまで歴史研究などにより積み上げられてきた精緻な研究成果に、文筆資料の詳密な読解を重ねていくことで、古代東アジアに展開した漢字漢文文化の意義や問題がさらに明らかになることが期待される。

(2) 「文」の概念に関する研究

『日本における「文」と「ブンガク (bungaku)』の刊行 「文」という概念は、東アジアの文化史において特別に重要な意味をもち、また実に多様な役割を果たしてきたと考えられるが、明治期に至ると、「ブンガク (bungaku)」ということばは専ら “literature” 等の訳語として現れ、現在に至っている。しかし、近代以降隠蔽されてしまった「文」の概念への問題意識なくしては、日本、そして東アジアの文化の本質に迫ることは不可能なのではないか。そこで、「文」の概念の文化的意味と意義を再び発掘することによって、二十一世紀の現代に続く「文」の意味と意義を捉え直すべく、研究協力者であるボストン大学 Wiebke DENECKE 准教授と協同してワークショップ「日本における「文」の世界・伝統と将来」を企画、開催（計 18 名の研究発表者とコメンテーターが参加発表、2012 年 7 月 21 日、22 日、早稲田大学（東京））し、その成果を『日本における「文」と「ブンガク (bungaku)』(勉誠出版、2013 年、255 頁) として刊行した。

『日本「文」学史 A New History of Japanese “Letterature”』の刊行 に掲げたワークショップ及び論文集の刊行をふまえて、「文」の概念に関する新たな体系を構築、発信すべく、『日本「文」学史 A New History of Japanese “Letterature”』全三冊(勉誠出版)の刊行を計画し、『日本「文」学史 第一冊 「文」の環境 「文学」以前』を 2015 年に刊行した。なお第一冊の刊行にあたっては、2014 年 5 月 31 日、6 月 1 日に執筆予定者が草稿を持ち寄り、ディスカッションや一般参加者もまじえて内容を検討協議する編集のためのワークショップを開催した(早稲田大学(東京都))。また、2016 年 3 月 27 日、28 日には第二冊『「文」と人びと 継承と断絶』の編集のためのワークショップを開催し、第一冊の時と同様、執筆予定者が草稿を持ち寄り、ディスカッションや一般参加者もまじえて内容の検討協議を行った(早稲田大学(東京))。第二冊は 2016 年度刊行予定、第三冊『「文」から「文学」へ 東アジアの文学を見直す』も引き続いで刊行を目指して計画を進行中である。

今後の展望 文学や人文学の危機ということが盛んに叫ばれる昨今、その危機を正視し、文学あるいは人文学とは何か、またその意義はいずこにあるのかを改めて問い直すことが必要ではないか。そしてその危機を、むしろ画期として、「文学史」を書き替える時期に来ているのではないか。そしてその、新たな、真の、日本の知と文化の歴史は、「文」

という概念を柱としてこそ描き出すことが可能なのではないか。上記、の研究活動を通じて、こうした展望を得るに至った。今後は、『日本「文」学史』全三冊の完結とともに、東アジアの「文」の古典世界や西洋の「人文学」との関係も含めて、日本の「文」の世界の実相と意義の追究を目指して引き続き研究を進めていく予定である。

(3) 日本に伝存する漢籍に関する研究

中国浙江工商大学東亜研究院との共同研究 本研究課題の研究代表者及び研究分担者が中心メンバーとなっている早稲田大学日本古典籍研究所は、中国浙江工商大学東亜研究院(王勇院長、2013 年 12 月に東亜文化研究院から改称)と連携し、日本および東アジアにおける古典籍、漢籍に関する共同研究を推進、実行してきた。まず、2012 年には、2011 年に早稲田大学日本古典籍研究所と浙江工商大学東亜文化研究院の共催により開催した国際シンポジウムの成果論文集『東アジアの漢籍遺産 奈良を中心として』(勉誠出版、412 頁) を刊行した。また、両研究機関の共催により 2013 年 2 月 2 日には早稲田大学(東京)にてシンポジウム「文化の衝突と融合 東アジアの視点から」を開催、その成果論文集『衝突と融合の東アジア文化史』(仮題、勉誠出版) を 2016 年に刊行予定である。また、両研究機関の共催により 2013 年 9 月 14 日～16 日には「東アジア世界における筆談の研究」及び「西湖のイメージ 東アジアの名勝の誕生・流伝・移動」をテーマとする国際シンポジウムを開催した(杭州(中国))。いずれのシンポジウムにおいても、書籍を中心とする日中文化交流、及び関連の研究課題をめぐり、本研究課題の研究代表者や研究分担者をはじめ、関連分野の研究者や大学院生などが参加、講演や発表を行い、研究、討論を深めることができた。とりわけ、日中双方の研究者が一堂に会して議論を行うことによって、日本古典籍をめぐる多角的な視座による研究成果を打ち出すことができたのは大きな収穫といえる。

講演、学会・国際シンポジウム、論文等による成果発表 日本伝存漢籍や、東アジアの文化・文学史における日本古典籍の意義や位置付けに関する研究成果を各種講演、学会・国際シンポジウムにおける研究発表、及び論文によって公開し発表した。近年、日本に伝存する古典籍、特に漢籍に対する関心は海外の研究者の間でも高まっている。中国、韓国、あるいは欧米等における講演や研究発表、論文発表を通して、関連分野の研究者と情報を共有し、今後の研究の展開や方向性などについても協議することができた。

今後の展望 中国や韓国、台湾、ベトナム、あるいは欧米における講演や発表、また研究調査を通じて、今後、日本伝存漢籍や日本古典籍に関する研究を、日本のみならず東アジア、より広くはユーラシアにおける典籍や古典形成の視点から捉えていく必要を感じて

いる。また、前近代から近代にかけて学問の枠組みが大きく移行していく中で、書物の目録分類法や図書館の建設等において、日本及び東アジア、さらには欧米各国が面した問題を再検証することで、現在に及ぶ「人文学」のあり方の問題を追究していくことが可能ではないかと展望している。今後の研究課題として取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計40件)

- 河野貴美子、北京大学図書館蔵の「燕京大学図書館日文书籍総計簿」、日本歴史、査読無、802、2015、pp.73-75
- 河野貴美子、『花鳥余情』が説く『源氏物語』のことばと心 「漢」との関わりにおいて、国文学研究、査読有、175、2015、pp.1-16
- 河野貴美子 他、渤海使関係詩注釈稿、早稲田大学日本古典籍研究所年報、査読無、8、2015、pp.26-95
- 新川登亀男、法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘の成り立ち、国立歴史民俗博物館研究報告、査読無、194、2015、pp.277-326
- 吉原浩人、銭塘湖孤山寺の元稹・白居易と平安朝の文人、白居易研究年報、査読有、16、2015、pp.97-125
- 陣野英則、『源氏物語』の言葉と時空 「ものあはれなり」をめぐる、国語と国文学、査読有、91-11、2014、pp.16-27
- 陣野英則、『源氏物語』の本文校訂をめぐる 「須磨」巻の「くしとらする」攷、国文学研究、査読有、174、2014、pp.1-12
- 高松寿夫、『懐風藻』序文にみる唐太宗期文筆の受容、万葉、査読有、218、2014、pp.21-34
- 高松寿夫 他、渤海使関係詩注釈稿、早稲田大学日本古典籍研究所年報、査読無、7、2014、pp.39-98
- 河野貴美子、古代日本仏典注釈書所引の《文選》初探 以善珠撰述書を中心、張伯偉編『域外漢籍研究集刊』(中華書局)、査読有、9、2013、pp.31-42

[学会発表](計84件)

- 河野貴美子、日本文学史における『日本靈異記』の意義 その表現と存在、上代文学会秋季大会シンポジウム「日本靈異記 その文学史的位置付けを考える」(招待講演) 2015年11月14日、國學院大學(東京都)
- 河野貴美子、清原宣賢所撰「抄物」中所引漢籍之研究 以《長恨歌並琵琶行秘抄》為例、南京大学「中国文学与東亜文明」協同創新中心他主催「第一届中国古典文学高端論壇 中国古典文学与東亜文明」(招待

講演) 2015年8月23日、南京(中国)

吉原浩人、聖徳太子南岳衡山取経譚の変容とその絵画化、中国社会科学院日本研究所他主催「湖湘文化と東アジアとの交流」国際学術シンポジウム(招待講演) 2015年8月21日、長沙(中国)

河野貴美子、『源氏物語』の“古注釈書”与中国古文献、北京大学国際漢学家研修基地他主催「国際漢学系列講第七十五講(招待講演) 2015年5月6日、北京(中国)

河野貴美子、Translingual Reading in Japan's Age of Civil War: Kiyohara Nobukata's Mengqiu Commentaries、Association for Asian Studies 2015 Annual Conference、2015年3月29日、シカゴ(アメリカ)

陣野英則、『源氏物語』作者の自己言及 藤式部丞と藤式部=紫式部、高麗大学校BK21Plus 中日言語・文化・教育・研究事業団主催碩学招請講演会(招待講演) 2014年11月11日、ソウル(韓国)

河野貴美子、燕京大学図書館収蔵日本文学を通してみる「人文学」の形成、The Sixth East Asian Humanities Forum、2014年11月2日、ソウル(韓国)

河野貴美子、Textbooks and Commentaries as Sources of Understanding the Formation of Early Japanese Language and Literature、The 14th EAJS International Conference、2014年8月28日、リュブリャナ(スロベニア)

吉原浩人、新出真福寺大須文庫蔵『心性罪福因縁集』院政期古写本考、中国社会科学院学部主席団主催「中国社会科学論壇2014・歴史学 第五届中国古文献与传统文化國際学術研討会」2014年10月27日、杭州(中国)

高松寿夫、『懐風藻』編者をとりまく文筆状況、第66回萬葉学会全国大会、2013年10月13日、東京大学(東京都)

河野貴美子、経学文献在古代日語文化中的展開 以源為憲撰《世俗諺文》を中心、南京大学「中国文学与東亜文明研究協同創新中心」他主催「経学与中国文献文化國際学術研討会」2013年8月21日、南京(中国)

新川登亀男、仏教は、なぜ流伝したのか 日本からアジアをみる、高麗大学校韓国史研究所他共催国際シンポジウム「古代東アジアの仏教文化交流とシルクロード」2013年8月16日、西安(中国)

河野貴美子、『源氏物語』と漢語、漢文、漢籍 古注釈が読み解く『源氏物語』のことばと心、第58回国際東方学舎会議(ICES)東京会議 Symposium 「源氏学」という学問 古注釈の方法と古記録・漢籍・仏典・古典学の書、2013年5月24日、日本教育会館(東京都)

河野貴美子、Lecture-based Commentary and the Reception of Bai Juyi's Poetry

in Japan: Kiyohara no Nobukata's
"Secret Notes on the 'Song of Lasting
Sorrow' and the 'Lay of the Lute'",
Association for Asian Studies 2013
Annual Conference, 2013年3月23日、サ
ンディエゴ(アメリカ)
吉原浩人、"文道之神"の誕生 学問之神
菅原道真的思想史意義、北京論壇(招待講
演)、2012年11月4日、北京(中国)
河野貴美子、日本古代仏典注釈書中所見の
訓詁 以《弘決外典鈔》為例、中国訓詁
学研究会二〇一二年學術年会、2012年10
月9日、杭州(中国)

〔図書〕(計41件)

河野貴美子・Wiebke DENECKE・新川登亀男・
陣野英則編、勉誠出版、日本「文」学史 A
New History of Japanese "Literature"
第一冊 「文」の環境 「文学」以前、
2015、530
河野貴美子・Wiebke DENECKE 編、勉誠出
版、日本における「文」と「ブンガク
(bungaku)」, 2013、255
河野貴美子・王勇編、勉誠出版、東アジア
の漢籍遺産 奈良を中心として、2012、
412
雋雪艶・高松寿夫編、北京大学出版社、白
居易与日本古代文学、2012、254

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野貴美子(KONO, Kimiko)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：20386569

(2) 研究分担者

高松寿夫(TAKAMATSU, Hisao)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：40287933

陣野英則(JINNO, Hidenori)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：40339627

新川登亀男(SHINKAWA, Tokio)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：50094066

吉原浩人(YOSHIHARA, Hiroto)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80230796

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

Wiebke DENECKE(ヴィーヴケ・デーネーケ)